

平城宮跡・平城京跡の調査

平城宮跡発掘調査部

1982年度、平城宮跡発掘調査部では、宮内において、内裏北外郭東北部、推定第一次朝堂院、朱雀門西方の南面大垣、第一次朝集殿推定地など10件、京城において、左京四条四坊九坪など43件、合わせて53件におよぶ調査を実施した。以下、主要な調査の概要を報告する。

1 平城宮跡の調査

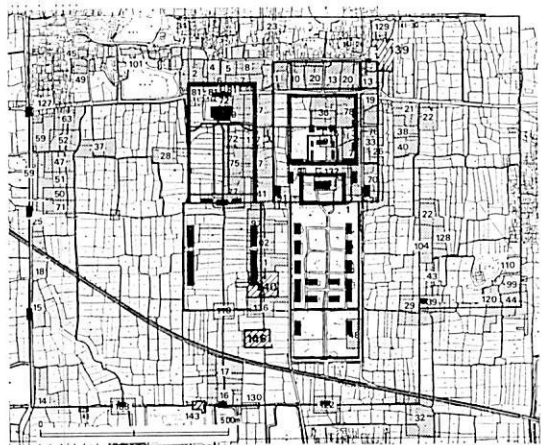
内裏北外郭東北部（第139次）の調査 調査区は平城宮内裏の東北部、内裏北外郭の東北隅をふくみ、第13次調査区・第129次調査区に南と北を接する。検出した主な遺構は掘立柱建物8棟、築地塀2条、掘立柱塀3条、溝13条、土壌10基などである。遺構の重複があまりみられなかったので、調査区を仮に4区に分け、各地区ごとに遺構の状況をみる。

内裏北外郭地区 南北築地 S A 705 と東西築地 S A 10500 の交わる、内裏外郭北東隅を検出した。S A 705 と S A 10500 は築地基壇部の版築を残し、寄柱と思われる柱穴がみられる。なお宮造営前の遺構に焼土壌 S K 10504～10511 がある。出土遺物がなく、性格は不明。

内裏北外郭北方 東西溝 S D 9797 と掘立柱の棟門 S B 9810 A・B は、第129次調査区で検出した官衙建物群の南を限る施設である。棟門の棟通り東延長線上に南北大溝 S D 2700 にもうけた木樋暗渠施設 S X 10560 があることから、S B 9810 A・B の東西に築地が存した可能性がある。内裏外郭の北面築地心との距離は 54m (180尺) になる。なお、掘立柱建物 S B 10565、柱根を残す S X 10580 は奈良時代に、掘立柱建物 S B 10590 は平安時代に、土壌 S K 10582・斜行溝 S D 10578、地山の凹み S X 10575・S X 10588 は宮造営前にそれぞれ比定できる。

南北大溝 S D 2700 S D 2700 は上幅 2.0m・底幅 0.9m・深さ 1.4m で、人頭大の三笠安山岩の玉石を 6～7 段積んで護岸した石組溝である。堆積層は 5 層に分かれ、最下層から養老 7 年の紀年木簡が、最上層から「天応」の銘をもつ墨書土器が出土し、この溝が奈良時代を通じて機能していたことが知られる。各所に、堰 S X 10535・石敷施設 S X 10555・横板をわたした護岸施設 S X 10556・木樋暗渠施設 S X 10560 が構築されている。

S D 2700 以東 東西溝 S D 10550 は上幅 2.7m・底幅 1.0m・深さ 1.7m の素掘りの溝で、下層から天平元年・天平 6 年の紀年木簡が、最上層から「天応天年」の墨書土器が出土した。なお、東の拡張区で、掘立柱建物 4 棟・掘立柱塀 2 条を検出した。このうち、S B 10544 と S A 10539 は奈良時代

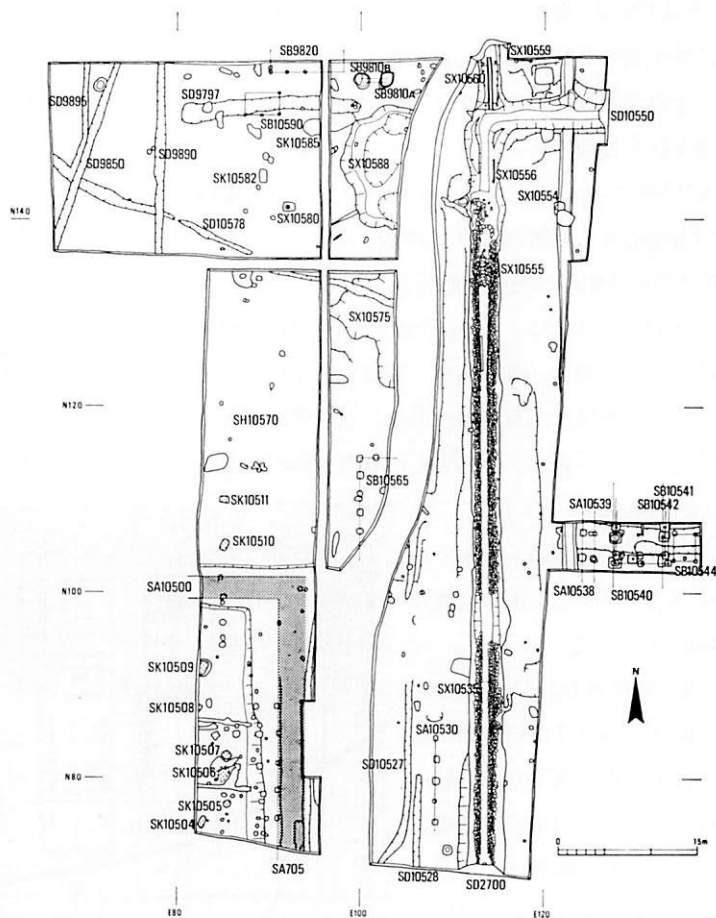


平城宮跡発掘位置図

以降のものとみられる。

遺物は主として南北大溝 S D2700 と東西溝 S D10550 から出土した。木簡は計258点で、養老7年～天平宝字6年の紀年木簡がある。大量の土師器・須恵器が出土し、この内に130点余の墨書土器がある。軒瓦は466点で、第Ⅱ期の6311—6664D・F型式、6313—6685型式、第Ⅲ期6225—6663型式が主体を占める。木彫面・「木」の陰刻文をもつ木印・飾鋳付漆塗木櫃片・などの木製品、金銅製垂飾・金銅製飾鋳・帯金具などの金属製品の出土をみた。

今回の調査は、内裏北外郭東北部の様相をかなり明確にした。4項目にまとめうる。1 内裏外郭の北面築地を新たに検出し、内裏外郭の規模を明らかにした。南北距離が必々で約372.5m(ほぼ1260尺)になり、内裏内郭の心々距離のほぼ2倍にあたる。2 平城宮東部の基幹排水路 S D2700 を90mにわたって検出し、規模・構造を把握するとともに豊富な遺物をえた。3 東西溝 S D10550 を検出し、この地区の区画割りに新知見をえた。4 内裏北外郭の北が、南北180尺にわたる広場的空間 S H10570 であったことを明らかにした。



内裏北外郭東北部調査遺構図

推定第一次朝堂院地区（第140次）の調査 推定第一次朝堂院地区については、これまでに第97・102・111・119・136次の5次にわたる調査を実施してきた。今回の調査は、東第二堂の規模と東第二堂南側の状況などを明らかにする目的でおこなった。そして以下の成果をえた。1 東第二堂の規模が判明した。基壇の復原規模は南北長約97m・東西幅約18mで、残存高約0.5m。礎石建ち東西廂付南北棟建物で、桁行21間約4.4m（15尺）等間、梁間4間約3.2m（11尺）等間である。桁行総長が92.4m（315尺）、梁間総長が12.9m（44尺）となる。2 第一次朝堂院では南北棟の基壇建物を東西に各2堂、合計4堂配置していることが確定した。3 東第二堂の南に、桁行16間約2.2m（7.5尺）等間、梁間4間約2.6m（9尺）等間の東西廂付南北棟掘立柱建物と、南北170m以上におよぶ抗列を検出した。4 東外郭に官衙域を検出した。5 5世紀前半代の古墳時代集落の存在が明らかになった。

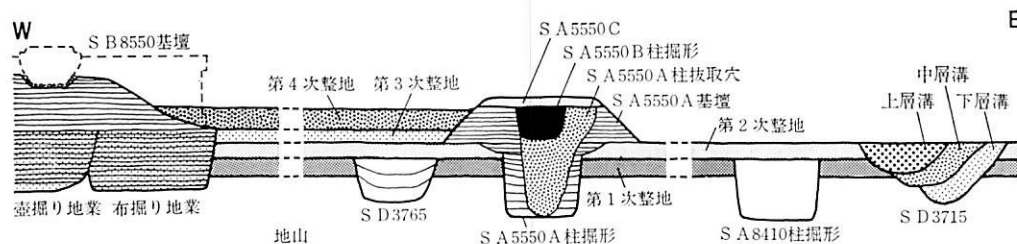
今回の調査で第一次朝堂院地区東半部の調査は終了し、この地区の全貌をほぼ明らかにすることができた。そこで、この地区にひろがる4層の整地土（第1次整地層—灰色砂礫土、第2次整地層—黄白色粘土、第3次整地層—暗灰色砂土、第4次整地層—瓦片を多量にふくむ暗灰色砂礫土）を手がかりに、奈良時代におけるこの地区全体の変遷を概観する。

A期 和銅創建当初の短期間の時期。地割溝とみられる細い東西溝が4条ある。

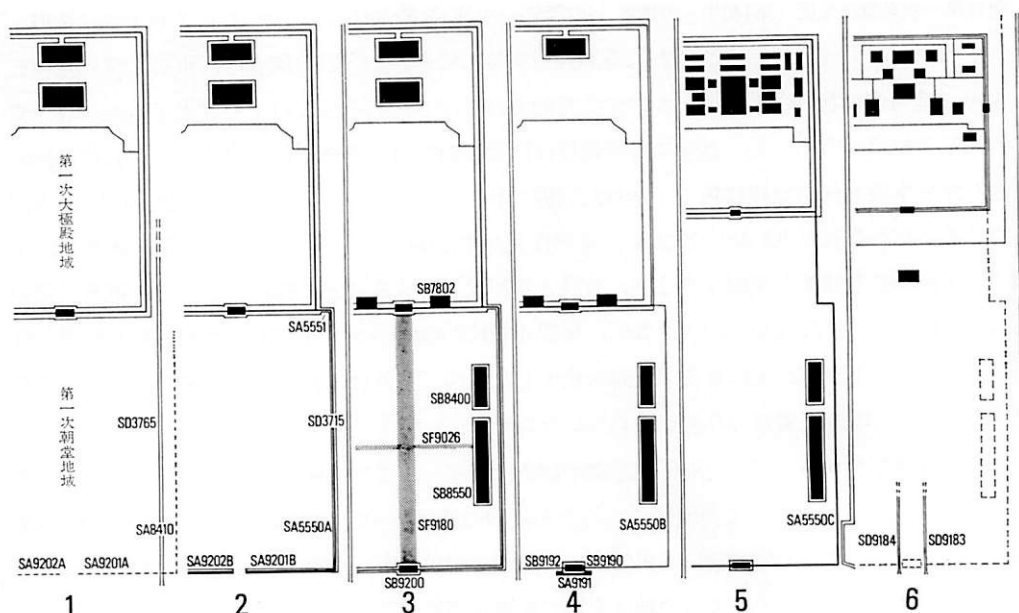
B期 第1次整地をおこない最初の造営がはじまった時期で、第一次大極殿地域第Ⅰ—Ⅰ期にあたる。基幹排水路の南北溝S D3765がある。東面・南面に掘立柱塀S A8410・S A9201A・S A9202Aの柱掘形を掘るが、柱を立てずに埋め戻す。

C期 第2次整地をしてS D3765を埋めたて、東に南北溝S D3715を掘削する。第一次朝堂院の区画（S A5551・S A5550・S A9201B・S A9202B）を作る。この規模は東西約214m（720尺、大600尺）・南北約284m（960尺、大800尺）である。南面のS A9201BとS A9202Bの間は15mあく。朝堂建物はいまだ建っていない。

D₁期 第3次整地後に東第一堂（S B8400）・東第二堂（S B8550）・朝堂院南門S B9200を造営する。第一次大極殿地域第Ⅰ—Ⅱ期にあたるであろう。S B8400とS B8550は一連の掘込地業をおこない、梁間を揃える。棟通りはS A5550の西約21.8mで、朝堂院東西幅の10分の1である。S B8400とS B8550の南妻はS A9201Bの北約17.9m、約70.4mにあり、この距離はそ



整地と遺構の関係



第一次大極殿・朝堂院地区変遷図

れぞれ小尺の600尺・240尺・大尺の500尺・200尺にあたる。大宝大尺でラウンドナンバーをえることは遷都当初に造営された第一次大極殿地域に一致する。第一次朝堂院が第一次大極殿院より一時期遅れて造営されたことは確実であるが、上記のことからみて遷都当初から四堂配置の計画で縄張りしていた可能性がある。

D₂ 期 第一次大極殿地域の第Ⅰ—3・4期に相当する。東面ではSA5550AをSA5550Bに改修する。南面では南門SB9200の前面に仮設の目隠塀SA9191とその両脇に接して詰所SB9190・SB9192が建つ。SA9201B・SA9202Bの改修の有無は不明。東外郭官衙はD₁期に初現を求めうるが、D₂期には確かに存在する。

D₃ 期 第一次大極殿地域第Ⅱ期に相当する。東面ではSA5550Bを築地塀SA5550Cに改修する。SA5550CにはSB8550の北から5間目に対応して門SB8980が開く。南面ではSB9200の仮設目隠塀と詰所を撤去する。SB9200には築地塀がとりつくともみられる。

D₄ 期 第一次朝堂院内郭に変化はない。第一次大極殿地域第Ⅱ期にあたる。

E期 第一次大極殿地域第Ⅲ期、すなわち、平城上皇の時期にあたる。SB8400・SB8550・SA5550は存在しない可能性がある。南門SB9200やそれにとりつく築地塀等の施設は廃絶しており、南北溝SD9183・SD9184がある。

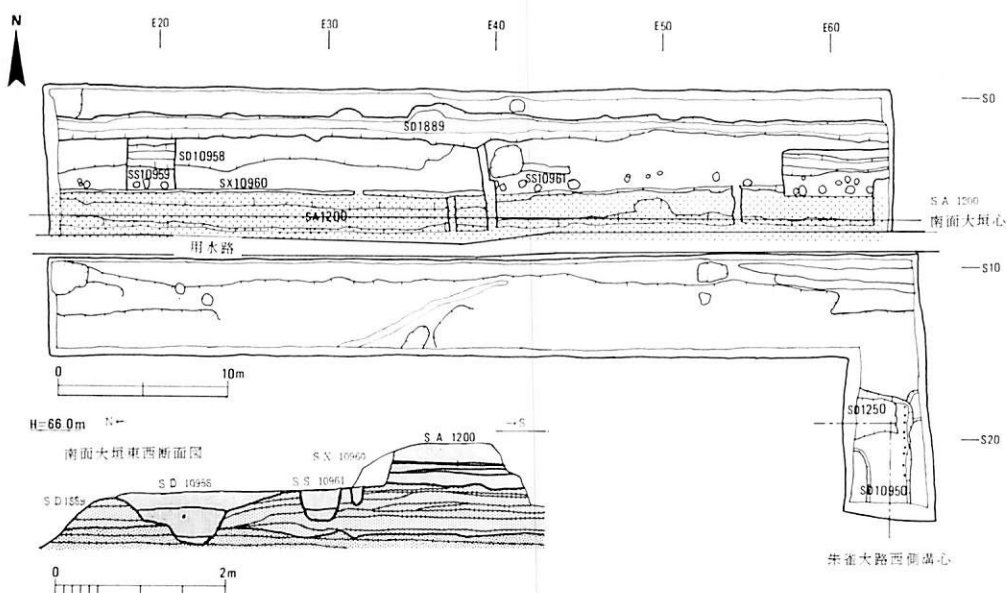
F・G期 朝堂院廃絶後には、SB8550とSA5550間の空閑地を一時鍛冶工房として使用し、その後、第4次整地で埋めつくす。第4次整地は平安時代末におこったと考える。

朱雀門西方の南面大垣（第143次）の調査 朱雀門西側の南面大垣復原整備に先だち、大垣に関する詳しい資料をえ、遺構の残存状況を確認し、さらに朱雀門付近の条坊遺構を確かめるために実施した。調査区は東西用水路を境に北区・南区に分けた。調査の結果、北区では大垣北側で堰板溝を新たに検出し、築地の北端を確認した。また、場合によっては掘込地業をおこなわないこと、東半においては築地幅を拡幅したことを明らかにした。南区では第130次調査の成果と合わせれば、朱雀大路東・西側溝は二条大路を横断して二条大路北側溝に接続すること、同北側溝は規模を縮小して朱雀大路を横切ること、さらに条坊制の基点となる朱雀大路東・西側溝と二条大路北側溝の交点を確認し、朱雀大路の路肩が明らかになった。

北区 掘込地業はせずに、地山に直接3～5層の整地をして、大垣S A 1200を築く。大垣の南辺は用水路で破壊されているが、幅1.5～2.0m、高さ0.5mの版築で築いた基底部が遺存する。北裾で堰板を据える溝状遺構S X 10960、これに接して添柱列S S 10959を検出した。東半にはこの築地を拡幅したものとみられる築土があり、S S 10961がこの際の添柱列であろう。東西溝S D 10958は築地構築にともなう溝状の掘り込み、東西溝S D 1889はS A 1200の北落溝かつ宮内道路S F 1880の南側溝である。

南区 東西溝S D 1250は二条大路北側溝で、かつ平城宮の南面外濠、南北溝S D 10950は朱雀大路西側溝である。

遺物は、主にS D 1889とS D 10950のしがらみの裏込めから瓦が大量に出土した。軒瓦のほぼ9割を藤原宮式が占める。他に鞘尻金具、木簡、人形などが出土した。



南面大垣調査遺構図

第一次朝集殿推定地（第146次）の調査 推定第一次 朝堂院東朝集殿の検出を目的に実施した。調査の結果、1 本調査区内には東朝集殿が存在しないこと。2 奈良時代初頭の宮基幹排水路である南北溝 S D3765が、南北溝 S D3715掘削後も南部で機能していた形跡があること。3 S D3765 と S D3715 の間に、第136次・第140次調査で確認された掘立柱建物がのびていること。4 4世紀後半から5世紀にかけての古墳時代の集落が存在すること、が判明した。

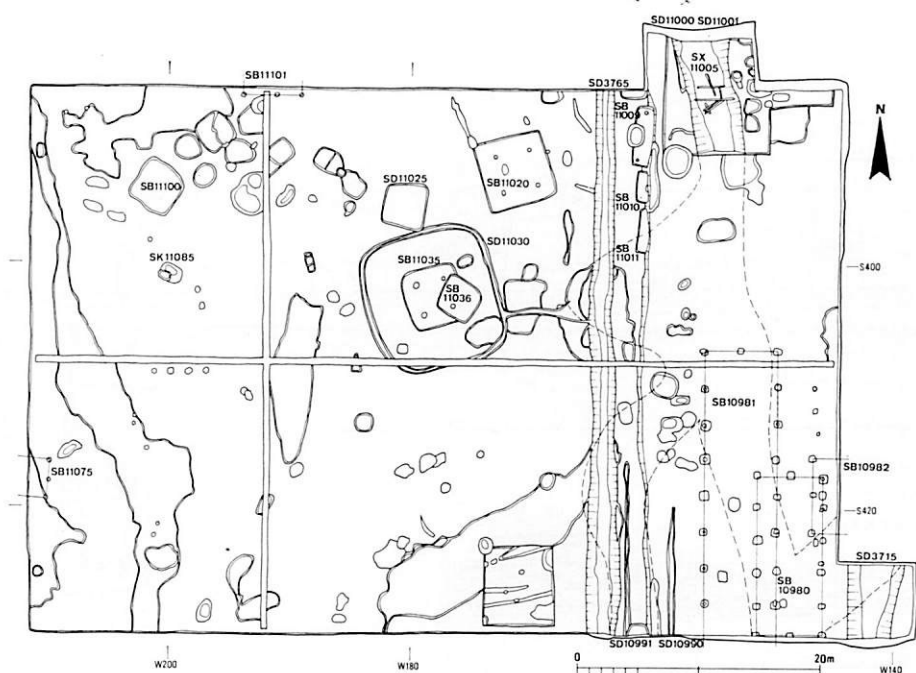
検出した主な遺構は、掘立柱建物5棟、南北溝4条、竪穴住居跡8棟、周溝1条、土壇12基などである。奈良時代に関しては、A、B、Cの3期に分けることができる。

A期 推定第一次朝堂院の建設前の時期。素掘りの南北溝 S D3765 がある。幅約2.0m、深さ約1.0mで、3層の推積層の内、中・下層がA期にあたる。下層から瓦編年第Ⅰ期の軒瓦が出土した。S D3765以東に、暗灰褐色粘質土の第1次整地がおこなわれる。

B期 素掘りの南北溝 S D3715を掘削し、掘立柱建物 S B10980 を建てる。S D3715は幅約3.0m、深さ約0.4mの素掘り溝で、「菓料」「内大炊口人」と記す墨書土器の他、瓦編年第Ⅰ～第Ⅲ期の軒瓦が出土した。S D3765上層が堆積する。S B10980は5×2間（9尺等間）。

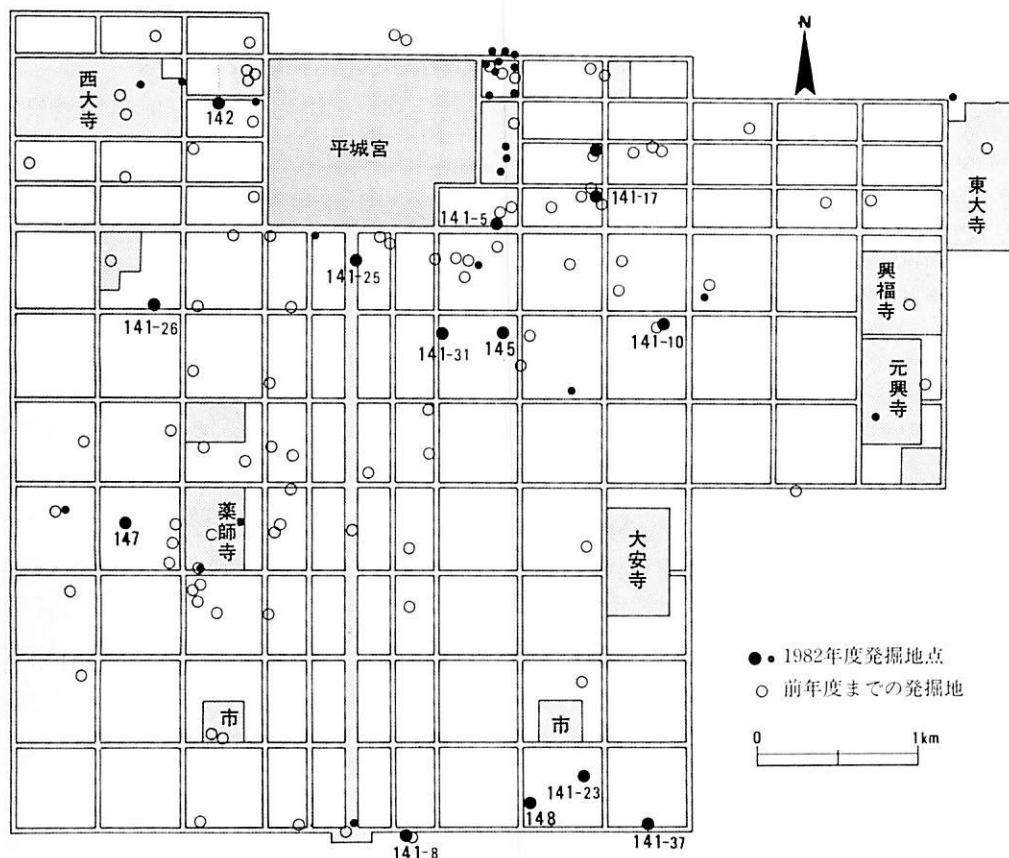
C期 黄褐色粘質土で第2次整地をおこない、S D3715を埋めたてる。南北棟掘立柱建物 S B10981を造営する。7以上×2間（10尺等間）。この建物の北に、土師器と須恵器を大量に廃棄する。なお、梁間2間の掘立柱建物 S B10982・S B11101・S B11075は平城宮方位に対して振れているため、C期以後のものと推定される。

（深澤芳樹）



第一次朝集殿推定地調査遺構図

2 平城京跡の調査



左京四条四坊九坪（141-9次）の調査 本調査は、奈良市三条宮前町3丁目6番地の白藤学園の校舎増改築に伴う事前調査である。ここは太安萬侶の墓誌に記されている左京四条四坊にあたる。調査は坊内九坪の西北部620㎡について行った。主な検出遺構は、掘立柱建物8棟、掘立柱塀5条、溝3条、土壌9基、東四坊坊間路などである。東四坊坊間路は路面幅7.3m、側溝心々距離9.0mを測り、計画寸法3丈の条坊道路である。

九坪で検出した遺構はすべて奈良時代の遺構であり、その重複関係や配置状況、出土遺物の検討からA・B・Cの三時期にわたる変遷がある。A期（奈良時代前半）の東西溝S D2401は、坪のほぼ1/4に位置しており、宅地割の区画溝と考える。調査区内には小規模な東西棟建物S B2391が1棟しかみられず、中心建物は調査区域外に予想されるが、A期の宅地割を1/4町ないし1/8町に想定させるものとなっている。B期（奈良時代中頃）になると、坪を分割する区画溝が廃され、少なくとも九坪西半部は一体の宅地となる。調査区内には雑舎しかみられないが、それらは一定の配置計画のもとに建ちならび、1/2町以上の整然とした宅地利用が推測される。このB期の宅地割はC期（奈良時代後半）にも引継がれるが、C期になると建物の配置に大きな変更がみられる。すなわち調査区内には雑舎と主要殿舎を限る内柵（S A2402・2404）が

L字形にめぐり、桁行6間、梁行3間で東・南に廂をもつ大形の南北棟建物S B 2390が配される。このS B 2390は建物の規模・形式からみて、主殿に対する脇殿的な性格の建物と考えられ、この建物の東もしくは南の調査区域外に主殿の存在が予想される。

遺物としては、掘立柱建物S B 2393の南妻柱列東第2柱穴の掘形から、羊を象った須恵質の形象硯が出土した。その他、S K 2412より出土した土器群は器種が豊富であり、天平年間の土器使用の実態を伺える好資料である。また、S K 2408の土壌からは百枚近い和同開珎が差銭の状態出土した。以上のように、九坪の宅地割と宅地利用状況の一端を明らかにすることができたが、調査面積が九坪全体の1/25にすぎないところから九坪をふくむ周辺地域の調査の進展が待たれる。（『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告』）

左京四条二坊十五坪（第145次）の調査 本調査は、奈良市尼ヶ辻町田村川の住宅地造成工事に先立つ事前調査である。調査地周辺は藤原仲麻呂の邸宅である田村第に推定されている。調査面積は600㎡。主な検出遺構は建物4棟・掘立塀3条・土壌6基・溝がある。遺構は切り合い関係から3時期以上に区分できる。A期では、桁行5間、梁行2間、8尺等間の東西棟掘立柱建物S B 2220と、桁行5間、10尺等間の東西棟掘立柱建物S B 2230、および10尺等間で南北の掘立柱塀S A 2240があるが、接近状態や重複関係から3小期の変遷があった。B期では、桁行5間以上、梁行4間の南北に廂をもつ東西棟礎石建物S B 2200があり、桁行は12尺等間、梁行は身舎9尺等間で廂の出は8尺である。柱側筋の北は坪掘、南は布掘地業を行う。礎石は抜き取られており抜き取り穴には礫・瓦類が投棄されていた。礎石建物の布掘地業の類例としては、平城宮のS B 5300（第37次調査）がある。礎石建物S B 2210は桁行5間以上、梁行3間以上の少なくとも東廂をもつ南北棟建物で、桁行12尺等間、梁行は身舎、廂とも10尺である。柱位置はすべて坪掘地業を行う。礎石は全て抜き取られている。建物の南側には11尺の出で掘立柱の縁が付されている。S B 2200とS B 2210は南面の柱筋を揃え、建物の間隔は柱心々で20尺であり、一連の建物と考える。C期では、掘立柱塀S A 2215があり、9間以上の南北塀で柱間は8尺等間である。

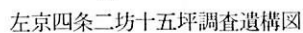
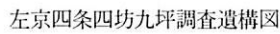
遺物はS B 2200の南側柱筋の礎石抜き取り穴から軒平瓦6670A（新形式）が、土壌S K 2206からは和同開珎が12枚、重なった状態で出土している。

検出遺構のうち、B期は出土遺物からみて奈良時代中頃である。この期の遺構は大規模な礎石建物群が整然としたコ字形配置をとる可能性がある。仮にこうした配置をとるとすると、ここが田村第の一部となる蓋然性は高いといえる。隣接地の調査が望まれる所以である。

左京九条三坊（第141-23次）の調査 本調査は、奈良市東九条町419-1の駐車場建設に伴う事前調査であり、調査は九条三坊十坪の東堀河と九条々間路の交差点推定位置にあたる約180㎡について行った。

東堀河は東市に物資を運搬するために開削された運河である。1975年の左京八条三坊の調査で検出し、遺存地割の検討によって、現大安寺宮地町の四条々間路付近から、京外の現地藏院

主な検出遺構は東堀河 S D1300 と九条条間路 S F 2351、堀河にかかる橋 S X2350である。東堀河は幅11 m、深さ 2 m に復原される素掘りの南北溝で、九坪の東西中軸線上に位置する。九条条間路は、南北両側溝の心々距離が 8.5～9 m を測る。この条間路が堀河と



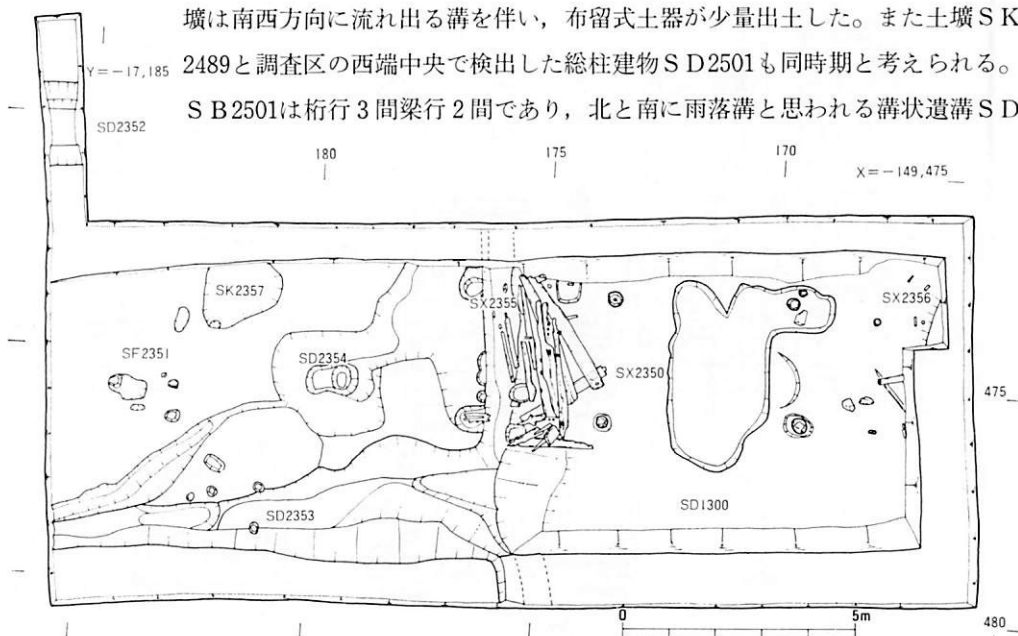
交差する部分から、梁間1間、桁行5間の八脚からなる木橋を検出した。木橋は九条条間路心にあわせて、梁行を条間路幅員の約 $1/3$ の9尺に施工している。原位置を保つ橋脚部分に対して、西岸には桁行1間分に相当する橋桁・梁・橋板材が護岸施設SX2355に転用された状態で遺存し、橋の構造をほぼ完全に復原できた。すなわち、橋脚は河の中央に、4本の太い柱を桁行約4m、梁間2.7mに配置し、西脚柱の西1.8mと東脚柱の東1.5mに補助脚柱をもつ。梁は柱頭に造り出した柄で受け、梁上に2本の桁を平行に架け渡して継ぐ。桁は横ずれしないように工夫され、さらに離間を防ぐために桁側面に太柄を用い、桁と桁、桁と梁を縄絡みで固定する。2本の桁上には橋板が敷き詰められており、桁の横振れによる落下防止が考慮されている。地覆の継手仕口や橋板との固定法は釘を用いず縄で結縛しており、地覆間に土を盛って路面としていたものと思われる。

東堀河SD1300からは多量の土師器・須恵器、三百点を超す金属製品、百点近い皇朝銭、木製品などが出土した。この中には多数の人面墨書土器、土馬、1mを超す等身の人形なども含まれ、東堀河が物資運搬用の運河のみならず、京住民の祓川としても機能していたことがうかがえる。出土遺物の年代から、東堀河は奈良末から急速に埋没し始め、平安初期には完全に埋没したことが知られる。（『平城京東堀河—左京九条三坊の発掘調査』）

左京九条三坊三坪（第148次）の調査 本調査は、奈良市西九条町4-1-9他における工場建設に伴う事前調査であり、調査地は左京九条三坊三坪の北半中央部で900 m^2 である。

検出した主な遺構は、掘立柱建物9棟、掘立柱塀1条、土塋2、溝3条などで、古墳時代と奈良時代に区分できる。古墳時代の遺溝は調査区南端で検出した土塋SK2488がある。この土塋は南西方向に流れ出る溝を伴い、布留式土器が少量出土した。また土塋SK2489と調査区の西端中央で検出した総柱建物SD2501も同時期と考えられる。

SB2501は桁行3間梁行2間であり、北と南に雨落溝と思われる溝状遺溝SD



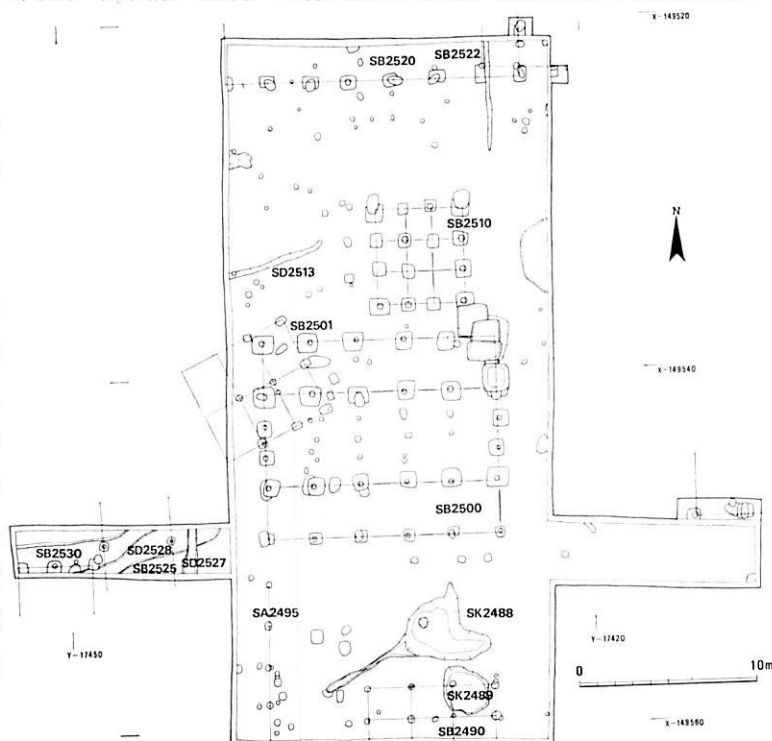
左京九条三坊・東堀河調査遺構図

2513・2528がある。奈良時代の遺溝はA、Bの2時期に区分できる。A期には桁行が9尺等間、梁行が身舎6尺等間、廂10尺等間の東西棟SB2500と、これに中軸線を揃えて北約50尺に位置する桁行8尺等間、梁行9尺の東西棟SD2520がある。B期では桁行8尺等間、梁行6尺等間の総柱建物SB2490、柱間7尺のSB2522、柱間13尺の南北棟SB2525のほか7.5尺等間の南北塀SA2475を4間分検出している。

遺溝の年代は、A期のSB2510の柱抜き取り穴から奈良時代中頃の土器、B期のSB2490の柱穴から奈良時代後半頃の土器が出土しており、A期を奈良時代前半、B期を奈良時代後半に比定できる。A期はSB2500・2520を南北に並べ、しかもSB2500をほぼ坪の中心に位置させていることから、一町の宅地を占有し、建物を整然と配置していたと推測される。B期の建物は小規模でまとまりに欠け、様相が一変する。三坪の特殊事情なのか否か今後の課題である。

奈良女子大学構内遺跡（第144-1次）の調査 平城宮跡発掘調査部では、1982年度に奈良女子大学に協力し、大学院・一般教養棟建設に伴う事前発掘調査を行なった。当該地は奈良時代には外京二条六坊十一坪に、中世では春日祭参向の勅使の宿所であった宿院御所の推定地周辺部、近世では奈良町奉行所西北部濠外にある。調査面積は500㎡である。遺構は上・中・下層の三面において検出した。上層遺構は、江戸時代の井戸2基がある。中層の遺構は、室町時代の建物、井戸、溝、杭列、土塀、および鎌倉時代後半の建物、土塀がある。下層遺構は、平安時代の土塀と奈良時代後半の門跡、南北溝、土塀、土管列などがある。奈良時代の門跡は1間の棟門で、その位置からみて十一坪と十四坪を分ける坪境小路（後の法蓮道）に面したものである。この門にとり付く築地塀は確認できなかったが、築地塀の雨落溝と思われる南北溝がある。遺物は弥生土器や埴輪片もあるが主体は奈良時代以降の土器と中世の軒瓦である。なかでも三彩小壺3、緑釉陶器片12、三彩の軒瓦片3、土馬11点などは注目できる。

（内田昭人）



左京九条三坊三坪調査遺構図

1982年度 平城宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	調査回数	調査期間	面積	備考
6 AAA・B	平城宮 第139次	82. 3.29～ 7.12	3800 m ²	内裏北外郭東北部
6 ABH・I・U・V	平城宮 第140次	82. 8.19～ 1.13	5600 m ²	推定第一次朝堂院地区
6 ABY	平城宮 第143次	82. 7. 7～ 8.20	810 m ²	南面大垣 朱雀門西
6 ACU	平城宮 第143次補	83. 2.14～ 2.21	75 m ²	南面大垣 若犬養門西
6 ABJ・K・W・X	平城宮 第146次	82.12. 7～ 5. 2	3100 m ²	第一次朝集殿推定地
6 BFK	平城京 第141-1次	82. 4. 7～ 4.22	110 m ²	法華寺旧境内
6 AFC	平城京 第141-2次	82. 4. 8～ 4.12	12 m ²	左京一条三坊二坪
6 BFK	平城京 第141-3次	82. 4.26～ 4.27	6 m ²	法華寺旧境内
6 AGF	平城京 第141-4次	82. 6.10～ 6.11	25 m ²	右京三条一坊坊間路
6 AFF	平城京 第141-5次	82. 5.10～ 5.26	275 m ²	左京二条二坊十三坪
6 BFK	平城京 第141-6次	82. 5.18～ 5.19	11 m ²	法華寺旧境内
6 AEE	平城京 第141-7次	82. 5.27～ 6.12	300 m ²	左京三条五坊四坪
6 AHT	平城京 第141-8次	82. 6.14～ 6.29	500 m ²	左京九条大路南辺
6 AFK・H	平城京 第141-9次	82. 6.24～ 7.10	600 m ²	左京四条四坊九坪
6 AID	平城京 第141-10次	82. 6.28～ 6.30	57 m ²	右京六条四坊七・十坪
6 ADA・I	平城宮 第141-11次	82. 7. 1	13.5 m ²	宮北方
6 BSD	平城京 第141-12次	82. 7. 1～7.2	5 m ²	西大寺旧境内
6 AFC	平城京 第141-13次	82. 7. 6～ 7.12	72 m ²	左京一条二坊・三坊
6 AGA	平城京 第141-14次	82. 7.12～ 7.15	113.7 m ²	右京一条二坊三坪
6 AFC	平城京 第141-15次	82. 7.20～ 7.22	7.5 m ²	左京一条二坊坊間路
6 BGG	平城京 第141-16次	82. 7.26	11.3 m ²	元興寺旧境内
6 AFE	平城京 第141-17次	82. 7.28～ 8.18	270 m ²	左京二条三坊十六坪
6 AFC	平城京 第141-18次	82. 8.11～ 8.12	8 m ²	左京一条二坊十坪
6 AFC	平城京 第141-19次	82. 8.16～ 8.22	17 m ²	左京一条二坊内小路上
6 AFC	平城京 第141-20次	82. 8.16～ 8.22	7.5 m ²	左京一条二坊九坪
6 BSR	平城京 第141-21次	82. 9.13～ 9.17	96 m ²	西隆寺旧境内
6 BYS	平城京 第141-22次	82. 9.16～ 9.23	24 m ²	薬師寺旧境内
6 AHN	平城京 第141-23次	82.10. 4～10.27	180 m ²	左京九条三坊・九条条間路・堀河
6 AAN	平城宮 第141-24次	82.11. 4～11. 8	7 m ²	官衙・市庭古墳周濠
6 ASO	平城京 第141-25次	82.11. 8～11.16	125 m ²	朱雀大路
6 AGH	平城京 第141-26次	82.11.11～12. 4	626.5 m ²	右京三条三坊五坪
6 BFK	平城京 第141-27次	82.11.25	6.7 m ²	法華寺旧境内
6 AFH	平城京 第141-28次	82.12. 3～12.10	53.6 m ²	左京三条三坊七坪
6 AFL	平城京 第141-29次	82.12.13～12.21	160 m ²	左京四条三坊十二坪
6 AAA	平城宮 第141-30次	82.12.14～12.16	11.3 m ²	北面大垣
6 AFM	平城京 第141-31次	83. 1.10～ 1.27	250 m ²	左京四条二坊三坪
6 BTD	平城京 第141-32次	83. 1.27～ 2.18	230 m ²	東大寺西面大垣
6 AFC	平城京 第141-33次	83. 2. 9	10 m ²	左京一条二坊坊間路
6 AGU	平城宮 第141-34次	83. 3. 4	5 m ²	宮北方・推定大蔵省
6 AFI	平城京 第141-35次	82. 3.11～ 4.12	356 m ²	左京三条二坊七坪
6 ASO	平城京 第141-36次	83. 3.15～ 3.25	80 m ²	羅城門北朱雀大路
6 AHQ	平城京 第141-37次	83. 3.22～ 4. 1	220 m ²	左京九条大路
6 AGU	平城宮 第141-38次	83. 3.29	10 m ²	宮北方・推定大蔵省
6 AGA・R・S	平城京 第142次	82. 4.15～ 5.13	900 m ²	右京一条二坊六・十一坪
6 AEN	平城京 第144-1次	82. 6.24～ 8.24	550 m ²	外京二条六坊十一坪
6 AFM	平城京 第145次	82.10. 8～11. 9	600 m ²	左京四条二坊十五坪
6 AIC	平城京 第147次	83. 1.24～ 3.16	996 m ²	右京六条三坊十坪
6 AHN	平城京 第148次	83. 2.22～ 3.30	900 m ²	左京九条三坊三坪
6 BYS	次数外	82. 8.23～10. 4	670 m ²	薬師寺中門・南面東回廊
6 BFK	次数外	82. 7. 2～ 7. 3	17 m ²	法華寺
6 BHR	次数外	82. 4. ～ 83. 3		法隆寺

3 平城宮・京跡出土の木簡

1982年度の調査では、平城宮跡の3個所と平城京跡の4個所の調査区から総計1,027点の木簡が出土した(調査会による左京二条二坊十二坪調査の41点を除く)。

主な木簡の积文は、『平城宮発掘調査出土木簡概報

	調査地区	次数	出土遺構	点数 (うち削屑)
平城宮	内裏北外郭東北部	139	南北大溝 S D 2700 東西溝 S D 10550 等	258(24)
	第1次朝堂院地区	140	南北溝 S D 3715 南北溝 S D 10325 B 等	759(668)
	南面大垣朱雀門西	143	朱雀大路西側溝 S D 10950	2(0)
平城京	法華寺旧境内	141- 1	東西溝	1(0)
	左京9条3坊10・11坪	141-23	東堀河 S D 1300	5(0)
	左京3条3坊7坪	141-28	東三坊々間路西側溝 S D 2325	1(0)
	左京3条2坊7坪	141-35	土壇 S K 2549	1(0)
計				1,027(692)

1982年度木簡出土点数

(16)』(1983年5月)に報告したので、ここでは内容的に興味深いものを中心に紹介する。

内裏北外郭東北部(第139次)出土木簡 調査区は平城宮の内裏北外郭東北隅とその東北方で、1981年の第129次調査区に南接する。木簡は内裏外郭の東側を南流する石組の南北大溝 S D 2700(「東大溝」、幅2m・深さ1.4m)から194点、調査区北端で S D 2700の東にとりつく素掘りの東西溝 S D 10550(幅2.7m・深さ1.7m)から63点が出土し、他に新しい時期の溝から1点が出土した(計258点)。S D 2700は平城宮東部の幹線排水路であり、すでに1928・32年の奈良岸岸熊吉技師による調査や第21次・129次調査によって検出している。今調査区と一部重なる岸氏の調査では「□内省」「内掃」など宮内省関係の墨書土器、少し下流の第21次調査では宮内省関係などの木簡290点、北接する第129次調査でも女官関係・薬物関係などの木簡171点が出土している。今回の調査では S D 2700と S D 10550が接する付近を中心に両溝堆積土の各所各層から木簡を得た。S D 2700出土木簡中には年紀を記載した木簡が19点あり、それらは石組溝の最下層から養老5～天平4年(721～732)、下から2層めより神亀3～天平9年(726～737)、下から4層めに天平宝字4～6年(760～762)と、堆積の層位順に出土している。さらに最上層からは「天応」(781～782)の銘をもつ墨書土器が出土し、S D 2700が奈良時代を通じて次第に埋まっていった状況が知られた。また S D 10550からも紀年木簡4点(いずれも天平年間)と、やはり最上層から「天応元年」(781)の墨書土器が出土した。S D 2700・S D 10550の堆積状況はほぼ同じであり、以下出土木簡を一括してみていくことにする。出土木簡全体の特徴としては、貢進物荷札木簡の点数が多く、そして削屑の割合が低い(9.3%)。貢進物荷札の中では、特に隠伎国からの海産物の荷札が両溝接合点付近から15点とまとまって出土したことが目立つ(6)。これらは養老～天平頃の年代幅をもちながら、いずれもやや小形で幅広の材の上下両端の左右に切り込みを入れ、一面に一部を割書きにした記載をもつという隠伎独特の形態・記載形式をもっている。他にも伊予国の貢進物荷札が8点と点数が多く(7)、このように遺構の一定箇所から特定の国の荷札木簡がまとまって出土したという状況は今調査に特徴的であった。また、第129次調査につづいて「典薬寮」(1)・「鰐肝」(9)・「玄蔘」(10)と薬物関係の木簡が数を増したことは、本地区周辺(北・東方)に関係官司の存在を示唆するもの

である。注目すべき木簡としては、「正丁作物」という税目を記した荷札木簡(4)がある。はじめて知られた「正丁作物」とは、調副物・中男正調にかえて「中男作物」の貢進を定めた養老元年(717)11月戊午詔(続日本紀)の中で、もし中男が不足する時は雑徭を役せよとした規定に依拠した貢進物であろう。次に、「参河国播豆郡大御米五斗」の荷札木簡(3)は、天皇供御用の米かと思われる記載をもつと同時に、別の「□□米五斗」という荷札木簡断片と同材(同年輪)であって、縦に細長い材を横に切断するか、分厚い材を縦に薄くさき割るかという木簡作成技法を示唆するものであった。その他、暦注を記した木簡(8)も興味深い。S D 2700・S D 10550からは木簡の他に木彫面・「㊦」の陰刻文をもつ木印などとともに、130点余の墨書土器が伴出した。記録には年紀の他「大膳」「内菜□」「□□厨^{〔女孺カ〕}」「官」「人給所」などの官司名、「烏膏」「酒」「菓」などの物品名、「供養」「上番」などがある。

推定第一次朝堂院地区(第140次)出土木簡 推定第一次朝堂院の東南地区において、第一次・二次朝堂院間を南流する幹線排水路である南北溝 S D 3715 と、その枝溝・つけかえ溝から木簡計 759 点が出土した。大部分が削屑であり(88.0%)、溝内に堰や杭群のあった地点から特に大量に出土した。遺構は、奈良時代中頃までの南北溝 S D 3715 (下層)とその西側にわかれる枝溝(東西溝 S D 10705 A・南北溝 S D 10706)、奈良時代後半の S D 3715 (中層)と南方で鍵の手状に曲がるその続きのつけかえ溝(東西溝 S D 10705 B・南北溝 S D 10325 B)である。

幹線南北溝 S D 3715 下層からは出土点数の半数以上の多量の削屑(「民部省移□」など)が出土した。同じく奈良時代中頃以前に位置づけられる枝溝 S D 10706 出土木簡には、一面に「京橋造不状/□□ 少疏倉人」、他面に「又十二日宣受史生土/十九日彈正臺口宣□□/東宮南道」などと記したもの(12)があり、彈正台が奈良時代に「検京中非違道橋及諸寺」(延喜彈正台式)を任務とした実例となるとともに、口宣の記録として政務の具体的な一端がうかがえて興味深い。なお南接する第136次調査でも S D 10325 から「彈正」銘の墨書土器を得ている。奈良時代後半に機能したつけかえ溝 S D 10325 B では、「左兵衛府奏」(13)・「中衛府」(14)・「衛門府」(15)といった衛府関係の記載をもつ削屑や、「造宮省」(16)・「造曹司所請」(17)など造宮関係木簡が特徴的であった。また「西大宮正月仏 御供養 雜物買□錢」(11)という木簡があり、「西大宮」——「西宮」すなわち第一次大極殿地域ないし内裏地域(『平城宮発掘調査報告Ⅹ』)で正月に仏事が行なわれたことが知られる。裏面署名者の添石前は天平神護元年(765)2月に県主から添県主と賜姓されており(続日本紀)、本簡の年代はそれ以降ということになる。

南面大垣地区(第143次)出土木簡 朱雀門西側の南面大垣の調査にともない、朱雀大路の西側溝 S D 10950 から、郷里制時代(715~740)の阿波国からの庸米貢進荷札(18)など2点が出土。

平城京調査の出土木簡 法華寺旧境内の調査(第141—1次)では、法華寺と南の阿弥陀浄土院との間を画する東西溝から「采女□」と記した習書木簡が1点。左京九条三坊十・十一坪の調査(第141—23次)では平城京の東堀河 S D 1300 (幅約11m)にかかる橋の遺構を検出し、東堀河から人形・人面墨書土器などとともに木簡断片5点。左京三条三坊七坪の調査(第141—28次)で

